

展示がもっと深くわかる！

◆小林達雄先生 最新ロングインタビュー コレクションを語る

◆小林先生に聞きました ～7つの質問～

集めたら、
こうなった。



企画展

考古学者 **小林達雄**
コレクション展

ARCHAEOLOGIST TATSUO KOBAYASHI COLLECTION EXHIBITION

入場無料

2024 10.5土 - 12.27金

開館時間 9:00 - 17:00 (最終入館16:30まで) 休館日 10月7日、21日 11月5日、18日 12月2日、16日

長岡市立科学博物館

〒940-0084 新潟県長岡市幸町2-1-1 さいわいのプラザ1階
TEL: 0258-32-0546 FAX: 0258-36-7691
主催 長岡市教育委員会 共催 信濃川火曜市古楽協会



小林達雄先生
最新ロングインタビュー
コレクションを語る



僕はどちらかといえば考古学一筋で、その時に視野に入ったさまざまなもの（興味や問題意識）の関係で、見逃すのがしのびない想いがあると、それは必ず、できるだけ手元に置くようにしてきました。

それというのも、どれもこれも甲乙つけて、こっちはいいけどこっちは要らないや、みたいなね、そういうのの前に、僕の眼には平等に映るんですよ。眼に入ったモノの中で捨てがたいモノ、それはなるべく可能な限り手元に置く。

そういう眼でいたものですから、地方に行っても、今も生活には直接かかわりを持たないようなモノ、たとえば蓑だとか笠だとか、そういうモノでも眼に入ると、このまま置いといたら、この地方でも早晚なくなるに決まっている。それを、「ちょっと待った！」という気持ちがあって、「手元に置こうと努力すればまだ救える」みたいなね。

蓑だとかそういうモノも、「ああ、この人がいなくなると最後だな」というようなモノについては、非常に勝手なんだけど、「いくら出すからつくってくださいよ」なんてことは一切言わないで、むしろ欲しがる顔をして、「そんならあげるよ」みたいな形で手に入れさせてもらったモノがいくつかあります。

最初からこういうモノを集めようとか、こういう目的でモノを集めようという、そういうモノはあまりなかったですね。今も同じような気持ちです。

最近、断捨離だとか要らないモノは捨てちゃおうみたいな、身のまわりをさっぱりしてエンジョイしようというような風潮が強くなってきた。少しでも今要らなくなったものを断捨離しちゃうわけ。

昔はすごく家自体が大きかったの。僕の家なんてのは間口が11間あったんですよ。そんなの当時は大きくないんですよ。というのはね、家の中でなにもか

もやってたの。農作業の一部だとかね、それから味噌づくりだとか、みんな家の中でやってたんですよ。だからね、家は大きくなるのどんどん。

でも昔、僕のおじさんが火遊びして、家を火事にしちゃった。それでなにもかも無くなったの。だから家は大きくても、なんにも残っていなかった。ただ、おふくろの実家に行くとか、山吉という見附の端っこ、刈谷田川のそばの土手の麓なんですけど。蔵も一つあったし、アメリカ帰りの人もいたしね。そういう面白い家だったんです。

蔵に入るといろんなモノが…うちがおじさんの火遊びでモノを失くした、そういった類のモノがいっぱいあったんです。その中に入ると楽しくてね、刀なんかいくらでもあって。ろくでもない刀ですよ。みんな昔は百姓でも刀を持っていたんですよ、隠してね。で、そんなモノもあったりね。そんな感じの中で育ってきたんです。

やっぱり、人はね、人だけの関係の中で生きてきているわけじゃないんですよ。ご承知のように、僕たちは周りのさまざまなモノに囲まれて、その一つの雰囲気というか世界みたいなものが出来ていましたから、決して、人間関係だけじゃない。意外といろいろなモノが僕の目の前に現われては消えてった。その中で生きてきて、齢に応じてこちらが興味を持ったモノが、それなりに、いろいろなモノの中からそれを選択して、自分が確認していくみたいな。そういう生き様というものが一つあったんじゃないかと思えますね。

さっきも話をしたかもしれないけど、僕は考古学一筋なんです。その考古学一筋の具体的な行動、行為とか、そういうものが何処に現われるかという、じつは本集めです。とにかく本を手当たり次第に、手に入る物であれば、手元に置く。

作家の吉村昭がね、前野良沢のことを書いている小説があるんです（吉村昭『冬の鷹』）。長岡藩もなかなか優秀だったんだけど、長岡藩だけじゃなくて、ほんとうに江戸時代の大名ってのは、実はみんな素晴

らしいんです。

ご存知のように、江戸時代の大名なんてのは、みんな貧乏なんです。貧乏なんだけど、「米百俵」の精神にも通じるんですけども、人材育成ということについては真剣に考えていた。だから優秀なヤツは江戸に留学させたり、長崎で外国事情をちゃんと学ばせたり、そういうことみんなやってるんです。長岡の河井継之助だって外へ出て、自分というものを形成したわけですよね。

話は元に戻りますけども、吉村昭の小説の中で、前野良沢が蘭学を修めるために長崎に留学するんですね。3か月間だったかな。そのとき前野は、蘭学の知識が何もないんです。どうしようかなと思っていたら、先輩が「おまえ、とにかく本買って来い」と言うんです。大名はね、身一つで行って来いと言わないで、ちゃんと奨学金を与えるんですよ。それをどうやって使うかは、もらった人の考えであってね。

前野は先輩に「おまえにはやるのが具体的にないに決まっているから、本買って来い」と言われて、「ああ、そうだな」と思って本買って来るわけです。そこにオランダの解剖書『ターヘル・アナトミア』が入っているわけ。そういうことなんかを考えても、とにかくみんな本から出発しているんです。前野が本を買ったことで、それが後の『解体新書』につながり、日本の西洋医学への窓口になっていくみたいな。

僕はべつに前野良沢をお手本にしたわけじゃないけれども、ついこの間まで、僕のような人はね、例外じゃなかったんです。自分が必要とする本は、自分の手元に置く。そして必要であれば何回も読み直す。そうじゃなければ、もっともっと、もっとこんな事情についての本はないのかと、もうどんどん本を集めていくわけです。

三根山藩からいただいた米百俵ゆかりの本が阪之上小に残っていたようにね、全部それは本になって、それこそが財産になって。それも単なるカネに代えられるような財産ではなくて、文化それから知力、そういうものの基礎力になっているんですね。

そういう形はついこの間まであって。僕なんかも学生の頃は、考古学のためにご飯を、昼食を抜いてでも本を買ったもんです。しょっちゅう神田の古本屋を歩き回ってね。だから、僕はあの頃でも誰よりも一番、神田の古本屋めぐりをしたほうだと思います。

今はインターネットでちょんちょんとやれば情報がすぐ出る。「Hi! Siri! ○○について教えて」と聞けばすぐ出てくる。そんなことは、当時はありはしないわけで。そのかわり活字と親しくなったわけです。これは結構大事なことでね。僕個人が亡くなっても、僕が目でその時に必要と思った本はもうたくさんたまったわけです。だから、それはそれで、前野良沢ほどの価値はないけれど、それでもなんて言いますか、すごく可能性を内に秘めた財産になっていると思うんですね。

そういうこともあって、本集めは、考古学をするについての、僕の唯一の、そして至上の、情熱とも言うべきものです。

恩師の山内清男先生は、やっぱりそういう意味での本集めのひとなんですよ。だから本をいっぱい持っている。そのあとの芹沢長介とか江坂輝弥とか、あの年代まではそうでした。僕がそこに続いていく系譜の上に乗っているわけで、ただそこで終わりなんですよ。だから、僕は今、僕関係のものに限って言うと、日本で一番の蔵書数だと思います。それは、良いことなのか、悪いことなのか。時代は変わったけれども、そういう意味で、僕は最後の人間だったということです。収集はまだ続いていて、僕は今でもいっぱい本を買っているんですよ。

楽しいんです。書店から古本の目録が来たりすると、それが楽しみでね。見ると大抵、一冊はあるんですよ、欲しい本が。最近だったら、考古学じゃなくて、明治の文明開化のときの本。当時日本は頑張ったんですよ。いろんな本を文部省が率先して出版しています。百科事典的なものとかね、そういうのがあると



楽しくなって買っちゃうんです。

日本の文化の文明開化以降の動きも、出版物を見ているだけで流れがずうっと見えてきて、いやあ、日本もよく頑張ったなと思いますね。そういう眼で

買っちゃうもんだから、いつまでたっても本を買う楽しみみたいなのが無くならない。これも厄介なことになっているんだけどね。(笑)

(2024年8月28日 東京のご自宅にて)

小林先生に聞きました ～7つの質問～

(1) 一番古い記憶は何ですか？

わからない、曖昧です。弟はよく古いことを覚えていて、それを僕が怪しむと、もう涙を流して「そんなことない、本当なんだ」って言ってたくらい意外と古い記憶をいっぱい持ってたんです。僕は曖昧ですね。

(2) 夢はよく見えますか？

よく見ます。そして夢を見ると、夢に関連したことを、また起きてから思い出して夢を反芻します。しばしばあります。すごくいい遺跡を発見した夢も見ます。残念ながら、あんまり色っぽい夢は見ません。

(3) 夜型ですか、朝型ですか？

どちらでもないです。どちらにでも合わせられます。

(4) もし、タイムマシンで行くとしたらどの時代のどんな世界に行ってみたいですか？

特にないです。もしも、という考え方は、僕は普段あんまりやっていないですね。仮定の話でこうなった時はどうするかというような発想というのは、元々僕にはないんです。今、ここで、何をという「今、ここ」、それが僕にとっては大事なことです。

(5) ストレス解消法は何ですか？

ありません。これがストレスだっていうふうにあまり考えたことないし、そういう状態を経験していないですね。ああ、なんかストレスが溜まったなとか、というのはないですね。さっき言ったように、今、ここ

を、という自分の在り方を基本にして、そのところで考えたりいろいろしてますから。

(6) 好きな俳優、歌手はいますか？

女性なら美空ひばり。それから、越路吹雪が好きです。『ラストダンスは私に』とかね。越路吹雪は歌ったことはないですけど、美空ひばりはカラオケで歌いました。男性だと森繁久彌と渥美清が好きですね。渥美清はすごい役者だと思います。やっぱり寅さんに勝るものはないです。それと映画関係で言うと、北野武。僕は彼と『新潮 45』という雑誌で対談しましたがけれども、彼はあんなふうになんとなくこどっこいしてますけれども、映画への思い入れは特別なものがあると思いますね。ほかの監督なんかと比べても、どうしてどうして、映画全体に対する思い入れは、武が人一倍じゃないでしょうか。

(7) 史跡の視察や講演会で全国へ行かれますが、旅に出るときに必ず持って行くものはありますか？

そういうものはありません。

カメラは必ずとか、そういうものは？

カメラは持って行きません。カメラを持つと写真を撮る方に気が行っちゃって。だから、ほとんど自分では聞くだけ、見るだけです。

ありがとうございました。

(2024年9月17日 東京のご自宅にて)

このリーフレットは、長岡市立科学博物館企画展「考古学者・小林達雄コレクション展」(会期：令和6年10月5日～12月27日)をより深く理解していただけるよう作成しました。企画展の開催にあたり、小林達雄先生、美津子夫人には多大なる御協力をいただきました。また、小林先生の教え子のひとりである新潟県立歴史博物館の宮尾 亨さんから、多くのご教授をいただきました。記してここに感謝申し上げます。